

富岡製糸場と深谷人

【第10回】

工女の母親的存在

松村和志

松村和志は、文化八年（一八一）三月十五日に下手計村に生まれ、明治五年（一八七二）から七年（一八七四）まで製糸場で働き、明治十年（一八七七）六十七歳で亡くなったとされています。

また、『上州富岡製糸場御役人付資料』には、工女取締として活躍した記録があり、創業当時の製糸場内で重要な地位にいたと考えられます。

製糸場に入場してすぐに工女取締二名のうちの一人となった和志は、場長の尾高惇忠よりも十九歳年上でした。十代から三十代の年齢が中心であった伝習工女たちの中では年長者で、生活面でも指導的な立場にありました。

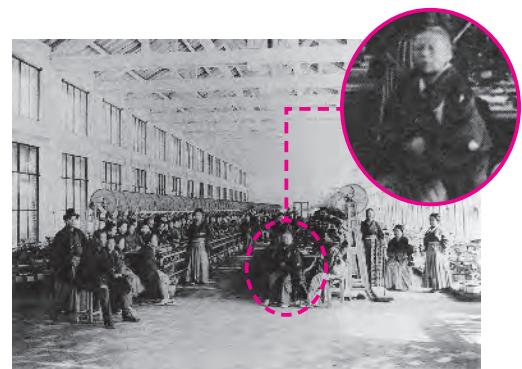
惇忠は下手計村の名主として、和志の人となりも十分承知の上、寄宿所で暮らす若い工女のまとめ役として、安心して任せられると見込み、工女取締に任用したことは想像に難くありません。

尾高勇に続いて同郷の下手計村の少女五名が工女を志願した背景には、母親的な和志の存在が大きかったと思われる。

製糸場の運営は、国内初の本格的な工場制度導入のため、就業規則や給料制度、産業医制度などの良好な労働条件が整い、後の民間製糸工場の『女工哀史』とは一線を画すものでした。

そして全国から応募する多数の工女を想定し、当初から製糸場には寄宿所が建設されました。

製糸場入場後、工女には寄宿所生活が義務付けられました。工女の安全確保や、就労管理の一環として『工女寄宿所規則』や『休暇工女遊歩心得』など一定の厳格な諸規則が整備され、



▲操糸工場内部写真(明治5年ごろ)、中央右側の女性が松村和志(今井幹夫富岡製糸場総合研究センター所長談)

その下での生活を余儀なくされました。それは帰郷後各地で指導的役割を担ってほしいという場長の惇忠の方針でもありました。

富岡の母として、モデル工場の工女としての品位を保つために、若い工女たちに集団の規則を厳しく守らせた、和志の厳しくも優しい姿が想像されます。

(文：荻野勝正)

故郷での活躍

ふるさとの期待と使命をおびた工女たちは、近代的な富岡製糸場の繰糸技術を1年～3年ほどで習得し、ふるさとに新しい工場が建設される中で指導者となっていった。やがて日本の生糸産業が飛躍的に発展する基礎を築いた。

(『富岡製糸場「絵手紙かるた」』NPO法人富岡製糸場を愛する会 より)



※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。



深谷市議会議員 須藤邦男

明けましておめでとうございます。市民の皆さまにおかれましては、輝かしい新春を健やかにお迎えのことと心からお慶び申し上げます。また、日ごろから市議会に温かいご支援を賜り深く感謝申し上げます。

さて、現在、地方自治体では長引く景気の低迷や人口減少・少子高齢化の進行など、さまざまな課題に直面しております。市議会といたしましても、市執行部との立場や機能の違いを踏まえ、互いに知恵を出しながら市政運営に取り組まなければならないと考えております。

昨年、深谷市議会では、議員定数を2名削減し、今春の市議会議員選挙から24名とする条例改正を行いました。今後さらなる行財政改革に向け努力してまいりますので、一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本年が、市民の皆さまにとりまして、幸せで飛躍の年となりますことを心よりご祈念申し上げます。新年のごあいさついたします。

平成27年年頭のごあいさつ

謹んで、新春のお慶びを申し上げます。

旧年中は、市民の皆さまには各般にわたる格別のご支援ご協力をいただき、心から感謝申し上げます。

古代中国の書物『礼記』に「声無きに聴き、形無きに視る」という言葉があります。これは、表に現れない意見にも注意を向け、形として現れないものの本質に目を向けようということを言わんとしています。

これからの深谷市は、人口減少や少子高齢化に伴う税収減、1市3町の合併による財政上の優遇措置終了などの多くの課題により、さらなる効率的で効果的な市政運営が求められています。そのためには、就任以来貫いてきた現場主義により引き続き皆さまの生の声を聴きつつ、「声無きに聴き、形無きに視る」ことも重視して市政運営にまい進していく所存です。

結びに、市民の皆さまの今年一年のご多幸、ご活躍を祈念申し上げ、新年のごあいさついたします。



深谷市長 小島進

ありがとうの手紙



優秀賞 中学生の部 スパイクへ

幡羅中学校2年(現3年) 村田海晴さん

いつもボールを蹴らせてくれてありがとう。ボールを飛ばしてくれてありがとう。雨の降った後のぬかるんだグラウンドの時も、相手の選手にふまれた時も、弱音をはかず、ずっと俺についてきてくれてありがとう。

スパイクは人ではなく物だ。だけど、スパイクは俺の大切な相棒だ。物だから友達みたいに感謝を伝えることはできない。だから、態度で表そうと思う。

絶対にうまくなるからな。そして、いつもありがとう、相棒。



優秀賞 中学生の部 「明日」へ

上柴中学校2年(現3年) 市川遥也さん

「明日」というのは、人やものではない。「明日」は目に見えないけど、「明日」がなければ人間は生きることはできない。目に見えないものに「ありがとう」というのは、少し変かもしれないが、僕は「明日」があることはとても幸せな事だと思う。今日という日がつらくてくじけそうになったとしても、「明日」があればまた新しいことにチャレンジすることができる。「明日」がくるのはあたり前ではない。だから僕は「明日」に「ありがとう」と言いたい。